

## ◆質的調査（インタビュー調査）の詳細

### 1. 各調査班からの報告

#### グループ1. 大塚福祉作業所

##### 1. インタビュー紹介

施設名／種別	大塚福祉作業所／就労移行支援、就労継続B型
日時	2016年10月26日 13:00～15:00・11月2日 9:30～11:30
対象者	Aさん(20代・女性)、Bさん(20代・男性)、Cさん(20代・男性)、Dさん(20代・男性)、Eさん(20代・男性)、Fさん(30代・女性)、Gさん(40代・女性)、Hさん(40代・男性)、Iさん(50代・女性)、Jさん(50代・男性)、Kさん(60代・女性)、Lさん(70代・男性)
調査者	野島敏宏、加瀬航、永野真由、小川真帆

##### 2. インタビューの結果

###### ①相談

相談相手の項目を見てみると、「人に相談しない」がある。今回のインタビューではこれに当てはまる人が最も多かった。その理由として、相談することがない、悩みごとがない、悩みごとがあったとしても自分だけで考える、といったものであった。インタビューをしていると、相談があったとしてもそれをうまく説明できないために相談することはないという人や、信頼できる人がいないために相談できないのではないかと印象を受けた。

また、相談があっても一人で考えるといった答えに対しては、悩みを自分だけで溜め込んでしまうのではないか、はたして悩みを自分だけで解決できているのか、特定の相談できる相手がないのではないかと考えることができる。

一方で相談相手がいると答えた人は、お母さん、姉などの家族と友人、先生に相談していると答えていた。家族に相談すると答えた人の理由として、好きだからという理由であった。先生に相談する理由として、仕事のことでわからないことを聞きたいからという理由であった。

###### ②趣味・将来

趣味に関してはさまざまな回答が挙げられ、それらを大まかに分類すると「単独で行うもの」「他者で行うもの」になる。「単独で行うもの」については、「映画・ビデオを見る」「テレビでスポーツ観戦」「パソコンいじり」「家でゲーム」等が挙げられた。「他者で行うもの」については、ディズニーランドが好き、グループホームで友人とトランプ・オセロをする等が挙がる。また、「K-POPをよく聴く」「演歌が好き」「普段話さない人とお喋りするのが好き」といった回答も挙げられた。「他者で行うもの」については、自分の親しい関係にある人と一緒に行く趣味ではないかと推測できる。初対面の人とお喋りするのが好きという声を聴

く一方で、初対面が苦手で親しくするには時間が必要という声も聴くことができた。家族・施設以外での他者との関わり（＝新たな人間関係の形成）、地域との交流が必要であると感じられた。

将来に関しては、「お給料をいっぱいもらえるように仕事をがんばる」「両親の手伝いがしたい」等の現状維持の回答や、「お笑いコントがしたい」「本屋さんになりたい」「自立したい。大阪に住みたい」「今後は就職したい」等の自分のもつ夢・目標を実現したいという考えの回答も挙がる。このことから、利用者の趣味や好きなこと等のストレングスが、将来やりたいことに繋がっていることが多いと分かる。将来の心配事には、老人ホームへの入所、グループホームへの入所など、老後についての回答が挙げられた。高齢者施設に入所することで障害を抱えている自分たちは、新しい施設の環境についていけるのか、他の一般の利用者と仲良くなることができるのかなど、不安の声が年齢の高い利用者から多かった。

また施設での行事（イベント）やクラブ活動等の楽しみにしているという回答もあることから、現状に満足しているために悩みがないという声もみられた。

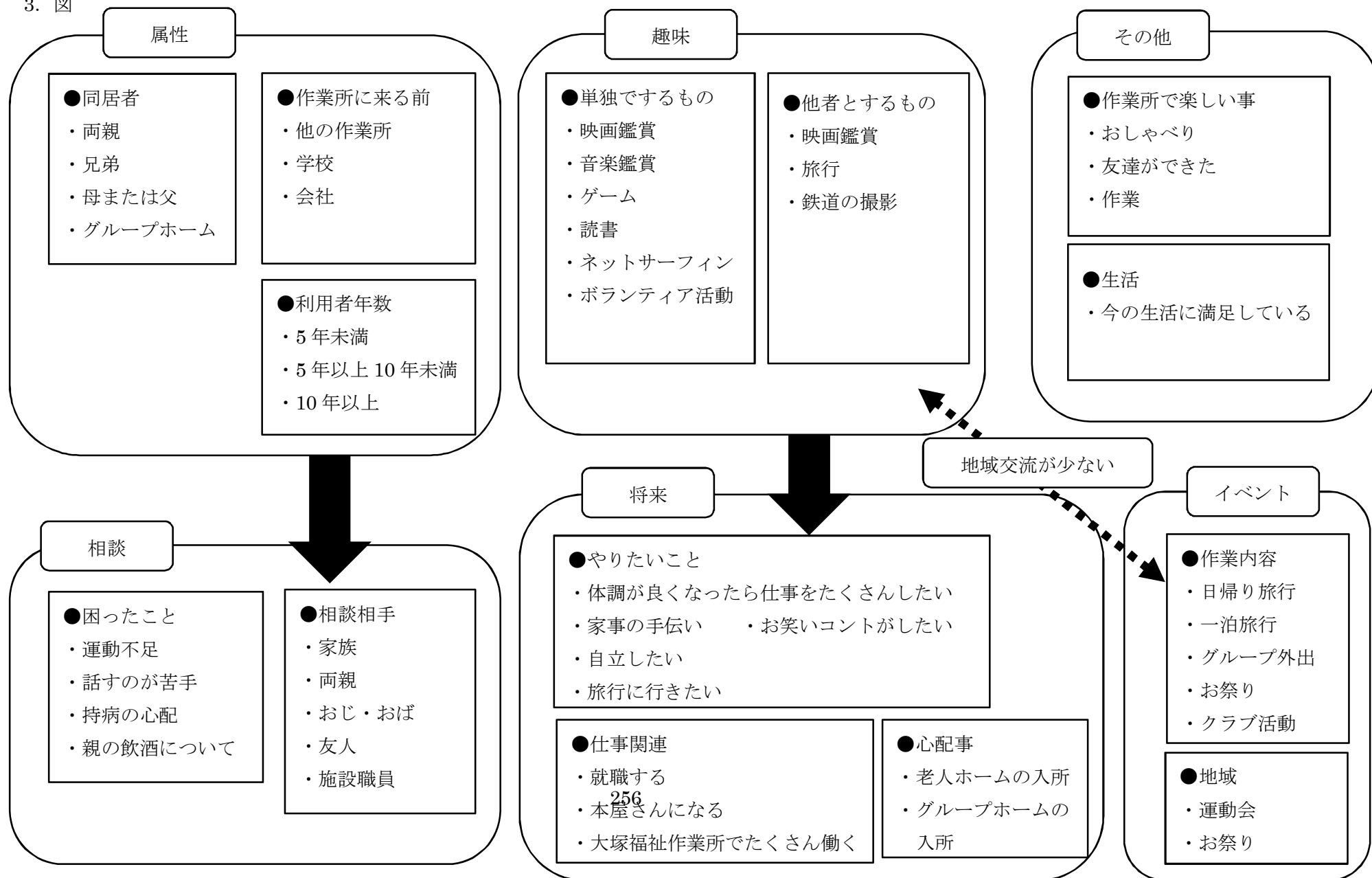
### ③イベント

作業所でのイベントについては、楽しかったことを尋ねてみたところ、お祭りなど作業所内で行われるイベントが多く、その他の楽しいと感じられたイベントは運動会が挙げられた。この事から作業所を通しての地域交流、社会参加の機会は少ないということが考えられる。趣味からもわかるように普段の生活の中で、地域交流や他人との関わりが作業所以外ではあまり見受けられなかった。

### ④その他

作業所内でイベント以外に楽しい事はあるか尋ねてみたところ、おしゃべりや、他の利用者または施設職員と仲良くなったことなどが挙げられた。作業所内は、コミュニケーションがとても取りやすい環境になっていることがわかる。また、作業所での普段の作業も楽しいという回答も多くあり、作業所内での普段の生活がとても充実していることもわかった。

3. 図



## グループ2. 小石川福祉作業所

### 1. インタビューの紹介

施設名/種別	小石川福祉作業所／就労移行支援・就労継続支援 B 型
日時	2016 年 10 月 27 日 10:30~
対象者	A さん（男性・70 代） B さん（男性・50 代） C さん（女性・40 代） D さん（男性・10 代） E さん（女性・30 代） F さん（男性・20 代） G さん（女性・40 代） H さん（男性・20 代） I さん（男性・40 代） J さん（男性・60 代）
調査者	大野彩夏・鈴木悠大・中丸実沙

### 2. インタビューの結果

インタビューの調査項目を次の 6 つにカテゴライズし、まとめた。

#### ① 個人属性

人間関係や、施設を選んだ理由等にピンスポットを当てて利用者自身の情報を聞いた。「家から近いから」と言った理由の他にも、「友人が施設で働いているから」、「母親や区役所と相談して決めた」という答えから利用者の人間関係が窺えた。

#### ② 趣味

利用者の趣味や休日の過ごし方についてまとめた。

ヘルパーと買い物・カラオケに行く事や、家事を手伝うことを挙げた方もいたが、多くの利用者はパズル、読書、野球観戦等一人で完結してしまう趣味を挙げていた。将棋が趣味だと答えた A さんは、将棋は好きだが打つ相手がいないと不満を漏らしていた。

#### ③ 地域

利用者が地域のイベントに参加しているか、という点から近隣住民との交流について調査した。

調査日と開催日時が近いと言うこともあり、多くの方が一歩いっぽ祭りが楽しみであると答えていた。

しかし施設以外でのイベントに参加するという方は一人もおらず、また、施設のイベントにもあまり関心を示していない方もいた。友人の有無によって地域交流の機会は大きく左右されていると考えられる。

#### ④ 施設

作業所の利用実態をまとめた。作業所の仕事に関しては「紙に携わる作業は楽しい」と言う方が多かったが、逆に作業が単純すぎて退屈だという意見も見受けられた。

また、利用者間の関わりにおいても不満を感じている方が数人おり、「他の利用者が騒がしくしているのが嫌だ」という声や「施設職員の対応に公平性を感じない」と言った事を話す方もいた。

#### ⑤ 相談

相談相手は誰か、その内容は、といった点から利用者に質問した。

相談相手は基本的に家族。施設職員や区役所に相談しているという方も複数見受けられた。相談内容に関しては答えてくれる方はおらず、そもそも困っているようなことはないという利用者が多かった。また、悩み事はあるが相談できる相手がいないという方もいた。

#### ⑥ 将来

将来に関して今後どうしたいか、不安はないか等を聞いた。

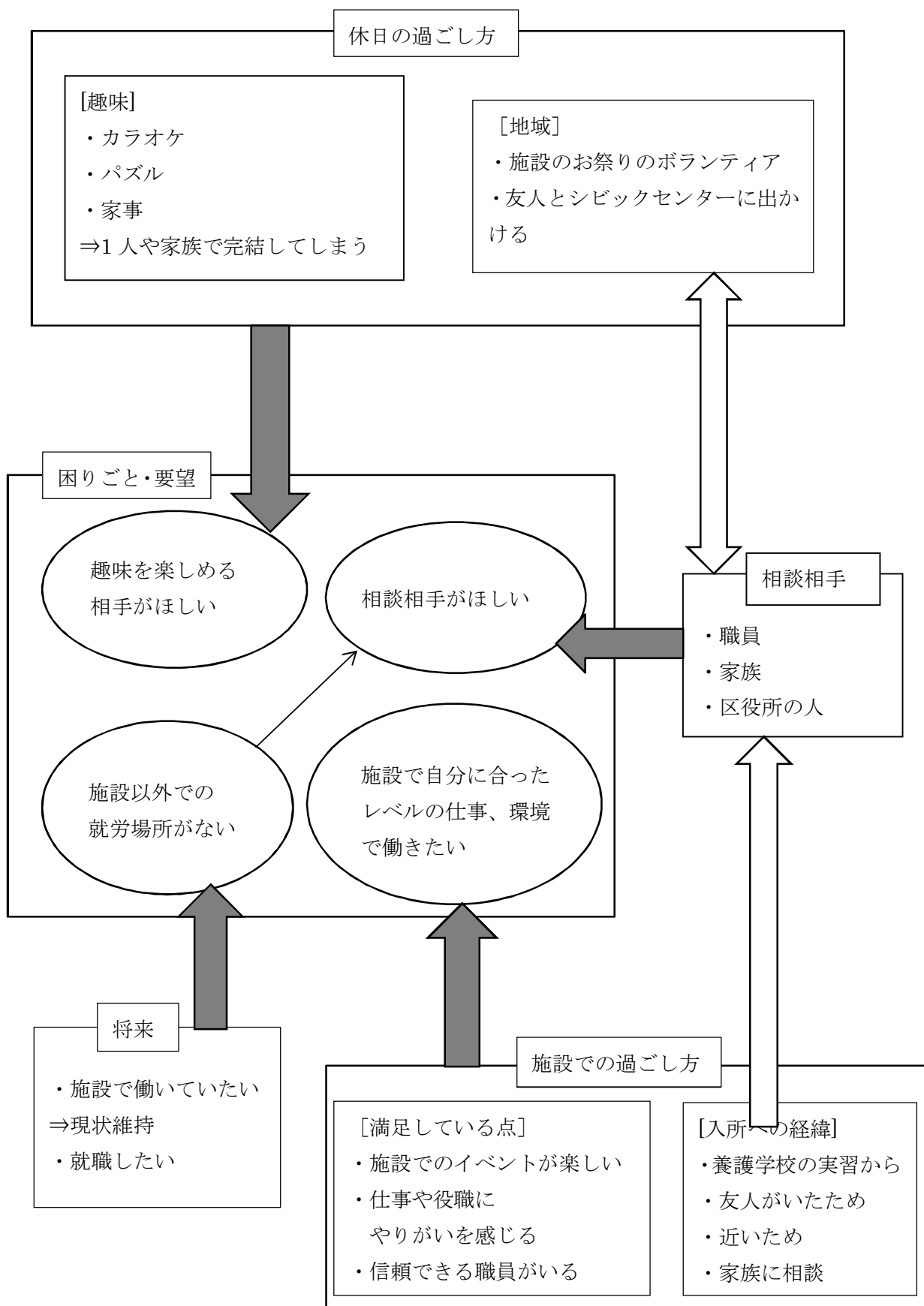
ほぼすべての方が現状維持を望んでおり、今のまま施設で働きたいと話していた。10代、20代の若い方は就職を望んでいるような事を話してくれたが、こちら側に流されてそのように答えたような印象も受けた。

### 3. 考察、提言

以上の調査結果から提言したいことは大きく分けて二つある。

一つ目はより利用者の交流の幅を広げてあげる事。これは利用者の趣味が一人で完結するものが多い事や、相談相手がいない方がいる事、作業が退屈であると感じる利用者があることから考えた。施設内で利用者同士の趣味を共有する時間を用意する等をして利用者の交流を促すことが、仕事に対する意欲を上げる事もあるのではないだろうか。

二つ目に作業の細分化だ。これは作業に対して前向きな方とそうではない方がいる事、そして利用者間で不満を持つ方が少なからずいたことから考えた。利用者の能力毎で常に作業を分けることが出来ればこのような問題も軽減できるのではないだろうか。また、ある程度関わることの出来る利用者を狭めることで逆に密な関係を形成できることもあるだろうと思う。



### グループ3. 若駒の里、だんござかハウス

#### 1. インタビューの紹介

施設名/種別	若駒の里、生活介護
日時	2016年11月2日(2時間)
対象者	Aさん(33才・男性) Bさん(36才・男性) Cさん(30才・男性) D(42才・女性) E(26才・女性) Fさん(28才・男性) Gさん(29才・男性) Hさん(26才・男性) Iさん(41才・男性)
調査者	青木宏治、小松原理沙

施設名/種別	だんござかハウス、生活介護
日時	2016年11月11日(1時間)
対象者	Jさん(20代・女性)
調査者	岸萌子、一条千菜美、篠塚七海

#### 2. インタビューの結果

##### ① 各セクションについて

インタビューから得られた回答をまとめ、KJ法を用いて各回答を系統別に分類した。その結果まとめられたセクションは以下の通りである。

##### 個人属性

- ・施設利用以前にいたところ特別支援学校等
- ・家族(父、母、姉等)と一緒に暮らしている。

##### 施設での過ごし方

- ・箸の袋詰め、牛乳パックを使ったハガキ作り、新聞バック作り、音楽療法、散歩、月に一度の外出等
- ・お箸等の袋詰めをする

##### 休日の過ごし方

- ・家族やヘルパーと過ごしている「ヘルパーと外出、家族で旅行」等
- ・カラオケ、遊園地、温泉等、家族やヘルパーさんとお出かけ

#### 困っていること

- ・運動がしたい
- ・給食の量が足りない
- ・散歩の量が足りない

#### 相談相手

- ・家族、友達
- ・グループホームの仲間
- ・学生時代は学校の先生

#### 趣味

- ・映画鑑賞
- ・じゃんけん
- ・カラオケ
- ・お出かけ
- ・ダンス

#### 将来

- ・歌手になりたい
- ・外国に行きたい
- ・だんござかハウスの職員
- ・先生になりたい
- ・結婚をしたい

#### 地域交流

- ・施設でお祭りをする
- ・パトロールを兼ねての散歩
- ・お祭りに参加
- ・ヘルパーさんとお出かけ

#### ② 各セッション間の関係について

- ・趣味について

趣味で挙げられた事柄は、1人や、家族、ヘルパーとの間で完結するものがほとんどであったが、利用者自身の生活の中で趣味が中心となり生活していることが多いと考えられたため、趣味を1とした。



・休日の過ごし方と人間関係について

休日にも家族、ヘルパーとの行動、施設内での交流を希望している。そしてそれは、願望の中でもその人らを特定して回答されていることが多い。これらのことから、人間関係の希薄さがうかがえる。

・将来について

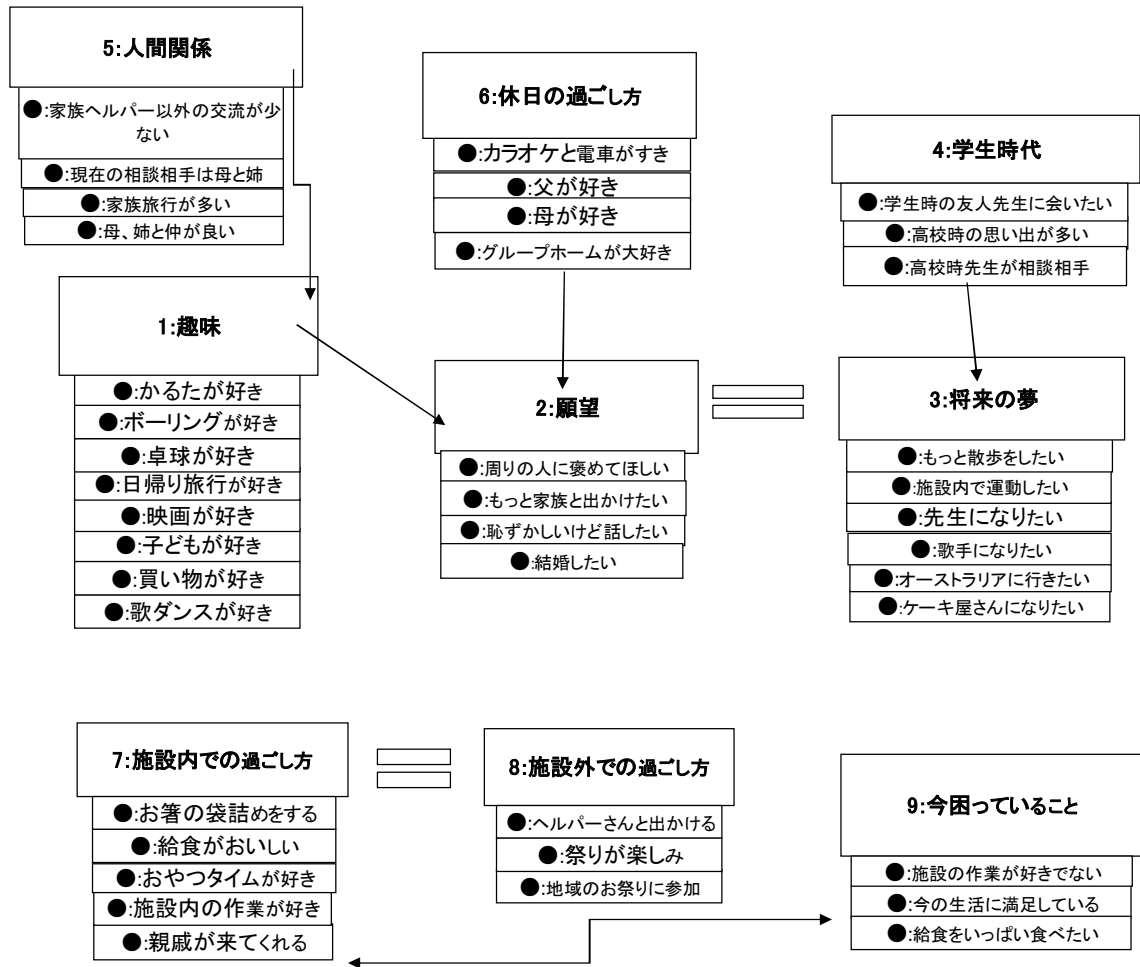
学生時代の思い出が多く、それが将来先生になりたいという夢に繋がっているという事例が挙げられた。しかし、今では学生時代の友人、先生に会う機会がないと考えられる。話をする様子や、現在の人間関係を鑑みると、学生時代の友人、先生に会う機会を作ることは彼らの生活を豊かにするのではないかと考える。

③ 見えてきた問題点

多くの調査対象者が余暇活動の際は趣味など自分の好きなことをして楽しむことができているが、親しい人や休日ともに過ごす人に家族や親戚などの身内の名前ばかりがあがっていることが印象的だった。このようなことから、身内ばかりではなく、もっと幅広く地域の人などと交流することができる機会を設けて多くの人と関わっていく中でより充実した時間を過ごすことができるようになると感じた。

また、インタビューの中でお出かけや家族の話など自分の好きなことは積極的に言葉にしていたが、施設の中の作業の様子などを聞いたところ、数人の人はあまり話が弾まなかった。このようなことから、施設内で楽しめているのかということが疑問として残った。

休日は家族と楽しんだり、ヘルパーさんを利用し、外出などをすることで充実した時間を送ることができているようであるが、施設での活動の中に楽しみややりがいをもっと多く作っていかなければならないと考えた。施設の職員との交流や他の利用者との交流がもっと増えていけば楽しみがさらに増え、休日以外にも充実した時間を過ごすことができると考えた。



## グループ4. 工房わかぎり

施設名/種別	工房わかぎり／就労継続支援B型
日時	2016年10月26日 10:30-14:30
対象者	Aさん(男性・10代)、Bさん(男性・20代)、Cさん(男性・30代)、Dさん(男性・30代)、Eさん(男性・30代)、Fさん(女性・20代)、Gさん(女性・20代)、Hさん(女性・20代)、Iさん(女性・40代)、Jさん(女性・50代)、Kさん(女性・60代)、Lさん(女性・60代)
調査者	宇田川俊、岡嶋里緒奈、近藤智洋、永田ちはる

### 1. インタビュー紹介

### 2. インタビューの結果

#### ①個人属性(家族構成など)

一緒に暮らしている人は親兄弟が多く、年齢に関係なく家族と暮らしている人が多い。グループホームへの入所を希望している方が1名いたが、今後も家族と暮らしていきたいと考える人が多いようだった。

#### ②施設利用の現状

工房わかぎりは筑波大附属大塚特別支援学校の親の会である桐親会を母体とした作業所で、卒業生が実習をきっかけに入所することがある。在学時に関係のあった先生などが来所することもあり、安心して働ける環境であると考えられる。前の施設長からの紹介で入所した方もおり、区内の施設間の連携もあるようだった。『施設を利用して楽しいこと』の中で「作業内容が楽しい」「利用者の輪の中で談笑することが楽しい」という意見が多かった。一方で、『施設を利用して困っている事』では「全くない」と答えた人が過半数を占めていたが、「利用者同士の人間関係に悩まされている」、またそれに伴って「別の作業所へ移ろうか迷っている」という回答や「作業内容が大変」という回答も一部見られた。しかし、人間関係で悩んでいると回答された方も「利用者同士の掛け合いや職員さんとの関わりは基本的に好きなため、残留しようか迷っている」とも答えていたことから、利用者同士の関係性は概ね良好である事がうかがえた。本項の傾向としては、前回調査時と比較すると『困っていること』が増えた印象だったが、これは前回調査時と比較してサンプル数が増えた事に伴うもののように感じた。

#### ③休日の過ごし方

『休日の過ごし方』は「テレビを見る」「読書する」「音楽を聴く」「PCゲームをする」など1人、または家族と家で過ごす内容のものが多い印象だった。一方で、「家族と旅行に出かける」「友達と散歩に出かける」「スポーツセンターのバラエティストレッチに参加する」など、家族、または友人と出かけるという回答も散見された。また「1人で散歩に出かける」と回答されたのは1名のみだった。これらのことからプライベートでの外出は同伴者がいないと実現されにくい

ことがうかがえた。また前回調査時の回答と比較すると、「職員の方と外出する」という回答が見られなくなっており、余暇活動で職員の方と外出する機会が何らかの理由で失われたことが推察された。

#### ④(施設外生活における)困っていること

『困っていること』では「家がセキュリティ会社との契約を解約したことが不安」「通勤電車が混雑していて疲れる」など個人的な要因のものが挙げられた。また一部だが、「金銭感覚がないので旅行に行けない」などといった金銭感覚がないことが障害となって、余暇活動の充実を妨げているという方も何名かいた。

#### ⑤相談

『相談相手』として、「両親や兄弟などの家族」や「施設の職員」「作業仲間や友達」などが挙げられた。このことから、家族との関係、施設との関係が共に良好であることがうかがえた。図で示したとおり、身近な存在である家族や職員・作業仲間などには積極的に相談するが、区への相談へは繋がっていないことが分かった。以上のことから、区への相談については「相談の仕方がわからない」「手続きが難しい」と考えている人が多いのではないかと推察した。

#### ⑥趣味

趣味を持っている方が多かった。「テレビを見る」「読書をする」「音楽を聴く」「DVD鑑賞」など、特に自宅で完結する趣味が多かった。一方で「ダンス教室で踊る」「習い事で太鼓を叩く」「母と旅行へ行く」など定期的に外出するという方も一定数いた。

#### ⑦将来の希望について

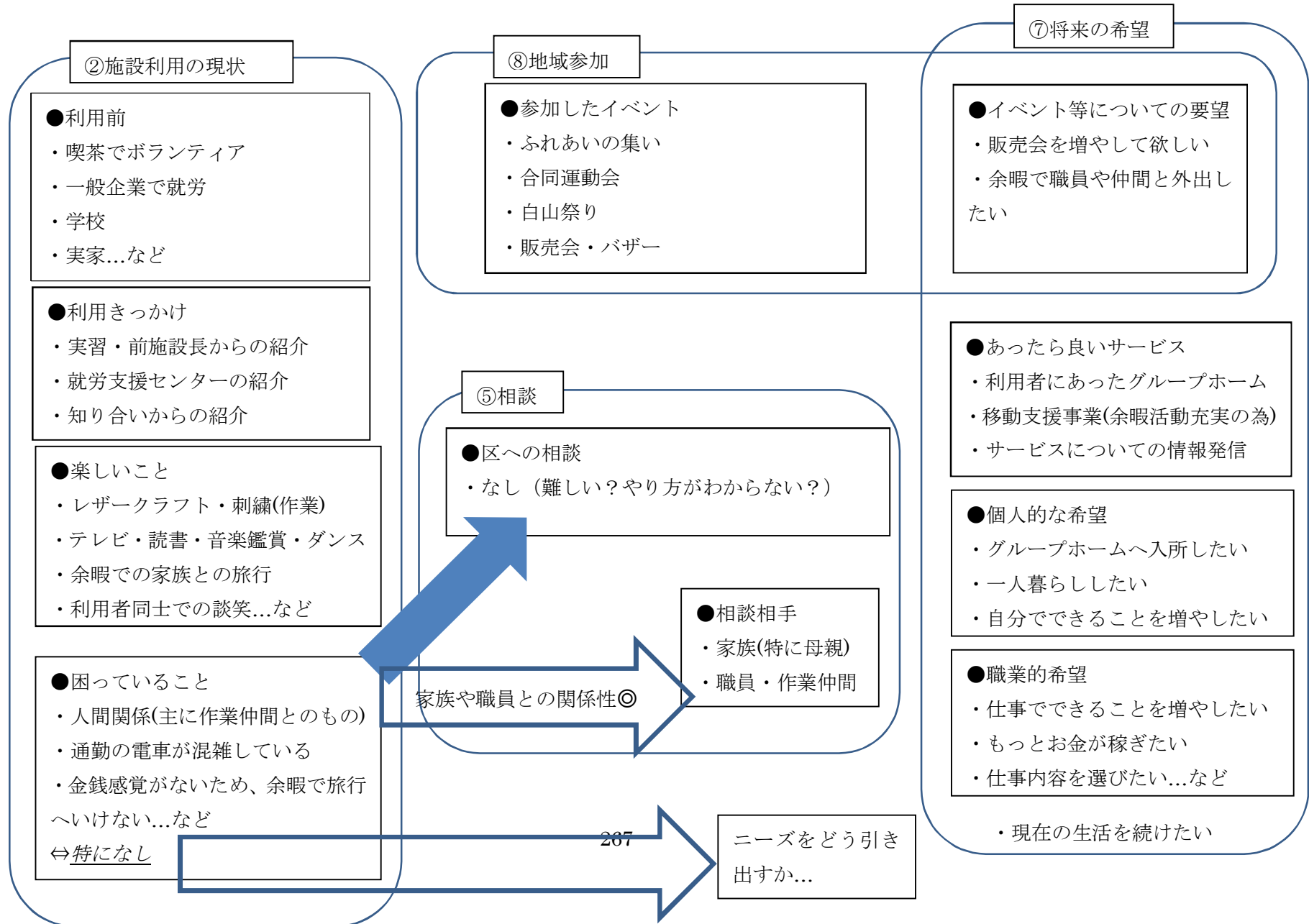
『将来の希望について』では「現在の生活を続けてゆきたい」「特になし」が最も多かった。それ以外で上がった回答としては「一人暮らしがしたい」「グループホームへ入所したい」といった住環境に関する希望を持つ方がそれぞれ1名ずついた。しかし調査を通して、後者の希望は両親が考えていることであり、本人がグループホームへ入所を希望しているのかどうかはわからなかった。『イベント等に関する希望』では「販売会を増やしてほしい」というサービスの希望や、「余暇で職員や仲間と外出したい」といった余暇活動の充実に関する希望が挙げられた。そのため、『あったらいいサービス』では「移動支援事業」を提案として挙げさせて頂いた。また同項目においては、『相談』の項で挙げられた「利用者の相談が区への相談に繋がっていない」ことに着目し、「サービスについての情報発信」も提案として挙げさせて頂いた。その他、「母と旅行へ出かけるために仕事を続けたい」や「好きな職員がいるなら仕事を続けたい」などモチベーションとなるものが、就労を促進しているという方も何名かいた。

#### ⑧地域参加

施設全体で「合同運動会」や「ふれあいの集い」「夏祭り」に参加している。現在、施設でのイベントにたくさん参加しているため、「今後も継続してイベントに参加したい」「充実しているので新たなイベントへの希望は特にない」という回答が多かった。また、施設で様々な地域へ訪問して行う販売会について「楽しい」「やりがいがある」との回答が多く見られ、地域参加や社会的繋がりを促進する意味合いでも販売会の存在は大きいように感じた。

その他、個人的なものとしては「家族と買い物に出かける」といった地域での購買活動のために外出される方が何名かいた。

3. 図



## グループ5. は〜と・ピア

### 1. インタビューの紹介

施設名／種別	は〜と・ピア、生活介護事業（通所）
日時	2016年11月2日(水) 10:00~10:30
対象者	Aさん(50代・女性)、Bさん(40代・女性)、Cさん(50代・男性)、 Dさん(50代・女性)、Eさん(50代・男性)、Fさん(60代・女性)
調査者	尾形綺里、増子友香、小林瑞夏

### 2. インタビューの結果

#### ①は〜と・ピアで楽しみにしていること

仕事自体（はし入れ）を楽しみにしている回答と、は〜と・ピアに来てみんなと関われることを楽しみにしている回答で分かれた。

#### ②自分の時間（は〜と・ピア以外の時間）に何をして過ごしているか

友達と話をして過ごす、妹のためにビニールを畳む、と他者との時間を過ごしている・他者のための時間を過ごしているという回答と、アイロンビーズ・編み物・テレビ等、個人の時間を過ごしているという回答に分かれた。

知的障害を持っている方は施設など以外では普段はひとりで過ごすことも多いと推測していたが、今回「友達」という存在を聞いた。

#### ③悩み事（今困っていること）

全員悩みはないということだった。明るく「ないです！」と答えてくれた方もいたが、インタビューの緊張で「今パッと出てこない」という人もいたのではないかと推測された。

#### ④（全員ないということだったので）もし悩みがあったら誰に相談（話）するか

悩みはないということだったので、もしあったら誰に相談するか聞いたところ、父母という回答と、支援員という回答があった。

中には名指しで支援員の〇〇さんと答えた方もいて、支援員を信頼しているように感じた。

#### ⑤趣味

趣味も一人でやること（塗り絵、アイロンビーズ、編み物、映画見る等）と、誰かとやること（母とお出かけ、月に1度のプール）という回答があった。

特にないと答えた方もいた。

#### ⑥夢や希望

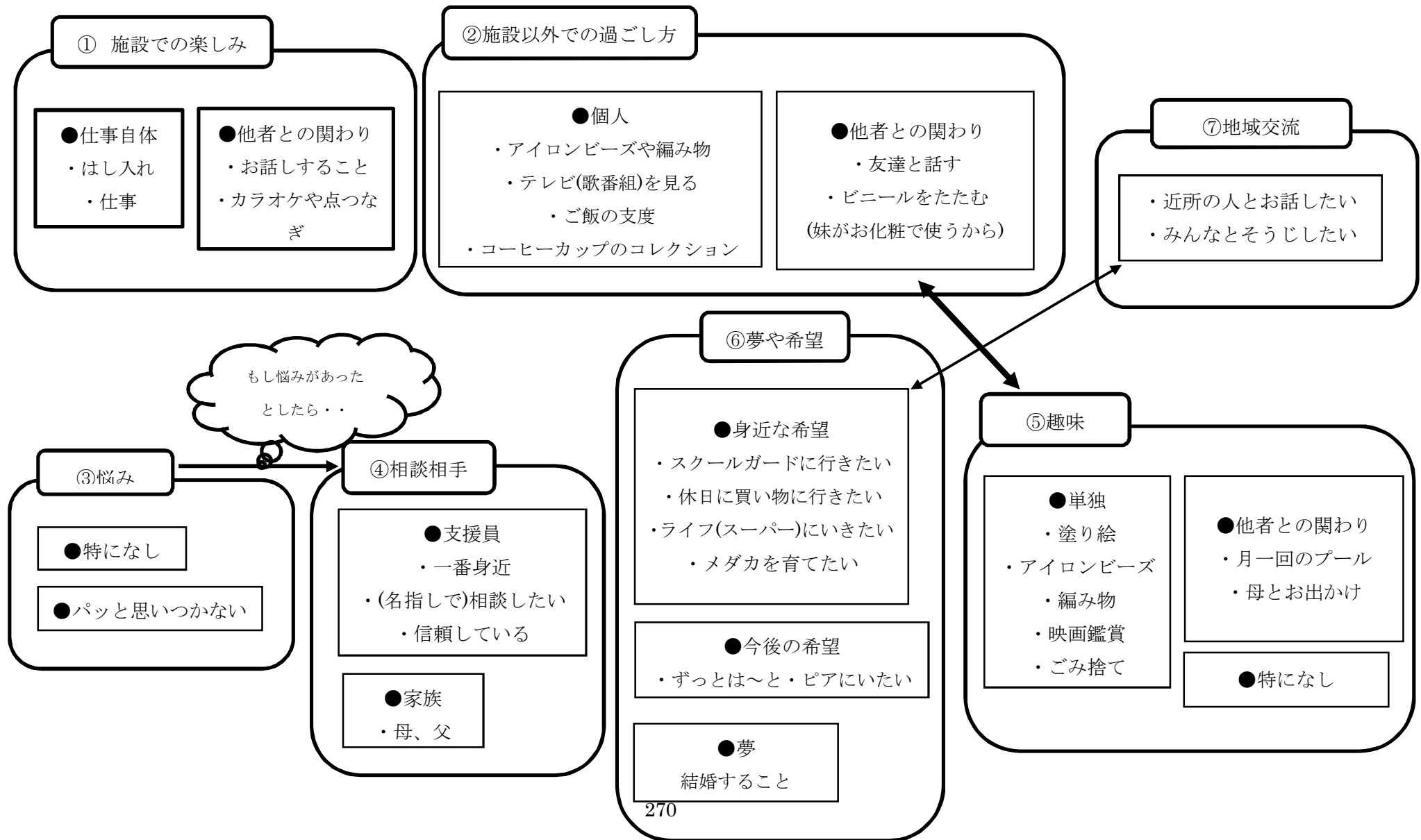
夢や希望を聞くと、スクールガードに行きたい、買い物したい、スーパーに行きたい、メダカを育てたいという、「いま」の身近な希望と、ずっとは～と・ピアにいたいという「今後」の希望、そして結婚したいという「夢」の3つに分かれた。

#### ⑦地域参加の要望

地域交流の要望（ご近所さんとお話したり、何かしたりしたいか）を聞くと、出来たら話してみたい・話ができたら嬉しい、みんなで掃除がしたいと、「関わってみたい」という回答であった。



3. 図



## グループ6. ワークショップやまどり

### 1. インタビューの紹介

施設名／種別	ワークショップやまどり／障害者福祉サービス事業所
日時	2016年10月25日 9:00~10:00
対象者	Aさん(男性)、Bさん(男性)、Cさん(男性)、Dさん(男性)、 Eさん(男性)、Fさん(男性)、Gさん(女性)、Hさん(女性)、 Iさん(女性)、Jさん(女性)、Kさん(女性)、Lさん(女性)、 Mさん(女性) ※年齢はプライバシーの為教えていただくことは出来なかった
調査者	野口恵、榎本晴香、飯村莉乃、ホウ・ブンシュウ

### 2. インタビューの結果

#### ① 趣味

主に『体を動かしている人』と、『屋内でくつろぐことを楽しみとしている人』の2タイプに分かれていることが明確となり、「趣味がない」と答えた人はいなかった。その2つのなかで、体を動かすと答えた人が比較的多く、「ダンス」「自転車に乗る」「好きなアーティストのコンサートに行く」等の意見があった。コンサートには、やまどりの仲間と行く人が多く、利用者同士の仲の良さ・距離感の近さを感じられた。また、屋内でくつろぐことを楽しみとしている人は「食べること」「テレビを見ること」「家事」「ペットのお世話」という意見があった。

趣味が将来の夢へと直結はしておらず、日々の生活の中で自分の楽しみの時間をきちんと確保していることが分かった。

#### ② 地域交流

やまどりで開催される行事に参加する人も多く、「スキー旅行」や「ボーリング」、「バザー」「ハンドベル教室」等の意見があった。しかし、これらはやまどり主催の地域交流であり、地域主催の行事だと「お祭り」への参加を通して地域交流を深めていることが明らかとなった。

全体的に、開催されるイベントへの参加意欲の高さがうかがえた。

#### ③ 困っていること

主に『やまどりの職員の方に対するもの』と『自分の家族・家に対するもの』との2タイプに分かれ、全員が何かしらの困難を抱えていることが明らかになった。職員の方に対しては、「職員の方からの注意に時折傷ついてしまう」「名前と呼ばれない時がある（“あなた”等）」という意見があり、普段の距離感が近い人だからこそその悩みであった。しかし、日々お世話になっている立場であるため強くは言えないという人もいた。その代わりに、同

じやまどり内の仲間に軽く愚痴をこぼすこともあるとのことだった。

家族や家に対しては、「家事をしたいけどできない」「両親がいないため今後は不安」「父が亡くなり母と二人暮らし」等の声があり、自分と最も近い存在に対する不安であることから、それが自分の将来への不安にもつながっている可能性が考えられる。

#### ④将来について

『こうなりたいという明確な目標をもっている人』と『希望というより不安の方が大きい・現状維持を希望する人』の2タイプに分かれた。目標が既にある人は、「本に携わる仕事に就きたい」「郵便関係の仕事に就きたい」「結婚したい」「歌手になりたい」「テレビ出演したい」という意見があり、自分の職や私生活、憧れ等について今から考えていることが分かった。中には、コンサートへ行ってから自分も歌手になりたいと考え始めたというように、趣味が転じて将来への希望につながっているというパターンもあった。

一方で、不安がある/現状維持を希望する人は、「自分がどうしたいかも分からない」「ずっとやまどりにいたい」との意見であり、先を見据える余裕は無く、模索しながら暮らしていたり、施設をとて信頼して頼っているという印象がうかがえた。

将来に対する考えが特にないと答えた人については、以下の理由が考えられる。

- ・現状に満足していて特には将来のことが気にならない
- ・日々の生活において刺激となる経験に出会う機会が少ない

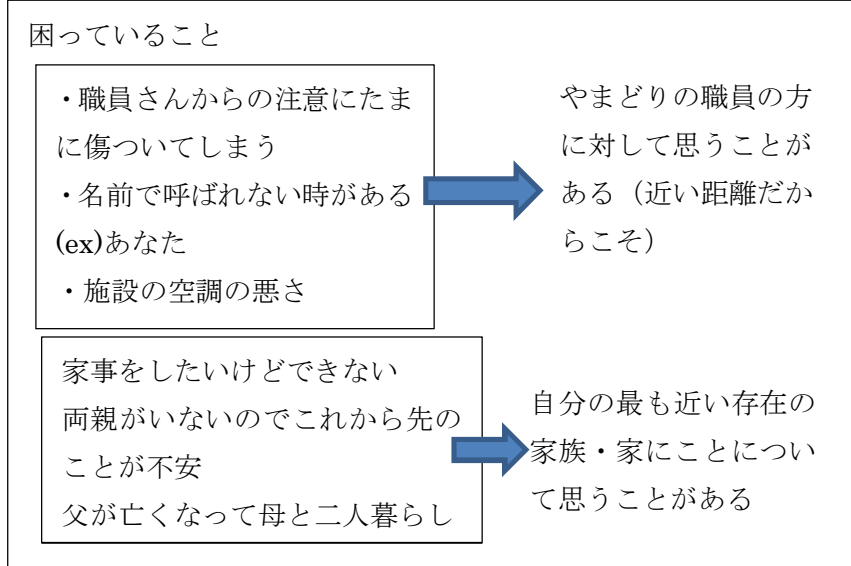
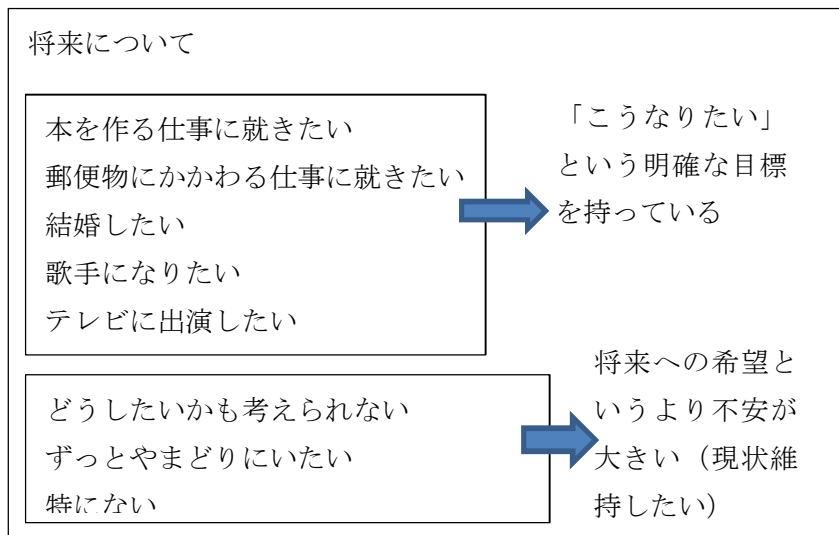
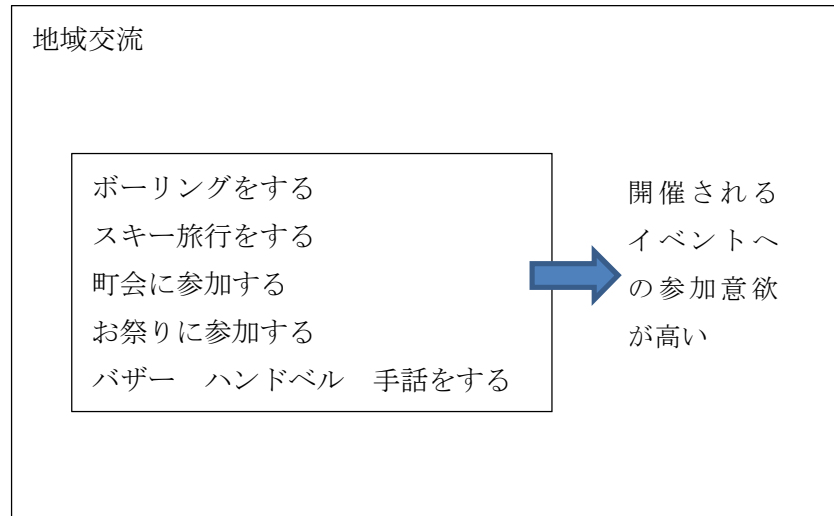
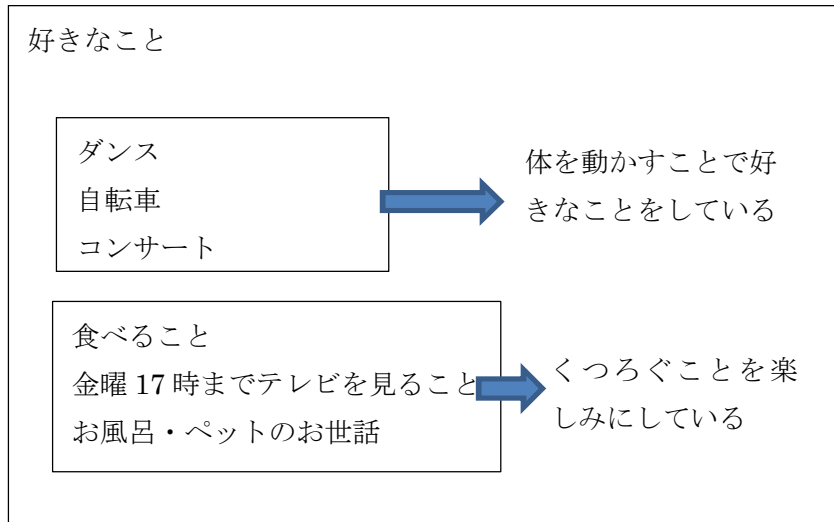
しかし、聞き取りの中からそれを判断することは出来なかった。

#### ⑤まとめ

施設内での対職員や利用者同士のコミュニケーションが非常に活発であり、年齢や障害の程度に関わらず非常に距離感が近かった。4つの質問のなかで「地域交流」に関しての意見が総合的に少数であったことから、自発性が比較的少ないと明らかになった。しかしその理由は、地域交流への参加のしにくさや、(施設利用者に対しての)交流に関する情報量の少なさ等が挙げられる可能性がある。

全体的にみて、施設に対する現状の満足度は高かったが、将来についてとなると、今から考えられる人とそうでない人とで明確に分かれ、意見の差が見受けられた。利用者の日常を支えると共に、将来への不安を共有できる時間や環境の確保も必要なのではないかと感じた。

3. 図



## グループ7. こぱん

### 1. インタビューの紹介

施設名／種別	こぱん／就労継続支援 A・B 型
日時	2016 年 11 月 2 日・9 日 10:30～12:30
対象者	A さん、B さん (10 代・女性)、C さん、D さん (20 代・女性)、E さん (10 代男性)、F さん、G さん (20 代・男性)、H さん (30 代・男性)、I さん (50 代男性)、J さん (60 代男性)
調査者	小池求実・石井優衣・山浦広平 (鈴木悠大・和田彰悟)

### 2. インタビューの結果

#### ① 個人属性

文京区の他に新宿区に住む方もいた。施設までの交通手段は電車・バス・徒歩で、所要時間は 10～40 分と様々であった。一人暮らしの方はおらず、両親・祖父母・兄弟と暮らしている。

#### ② 趣味

スポーツ、ゲーム、プラモデル、アニメ、映画、手芸、絵を描くことなど利用者一人ひとりが様々な趣味を持っていた。

#### ③ 施設での過ごし方

施設の清掃、箸の袋詰め、施設内カフェでの作業、クリスマスの装飾作りなどを行っている。好きな作業があるという利用者が多く、仕事にやりがいをもつ方が多いと感じられた。

#### ④ 困っていること

困っていることとしては、不快な言葉を言われること、家族や友人と喧嘩してしまうこと、家族の体調が悪いこと、飲食店など車いすで行ける場所が限られていることなどが聞き取れた。困っていることはないと答えた方もいたが、自覚していないことも考えられる。

#### ⑤ 相談相手

悩みごとを相談する相手は、家族・施設の職員、ヘルパーという答えがほとんどであった。

#### ⑥ 将来の夢

夢があると答えた方は 2 人で、「声優になりたい」「プラモデルを子供に教え

たい」という声が聞けたが、他の方は特に夢はなく現状維持を望んでいた。

⑦ 地域交流

近所に友人がいる方は少なく、地域のイベントに参加するなど地域交流をしている利用者は少なかった。しかし「社会参加がしたい」という声もあった。

⑧ 施設を決めたきっかけ

ほとんどの利用者が家族と決めたと答えた。しかし、利用者本人の意思決定がしっかりされているかは疑問に感じた。

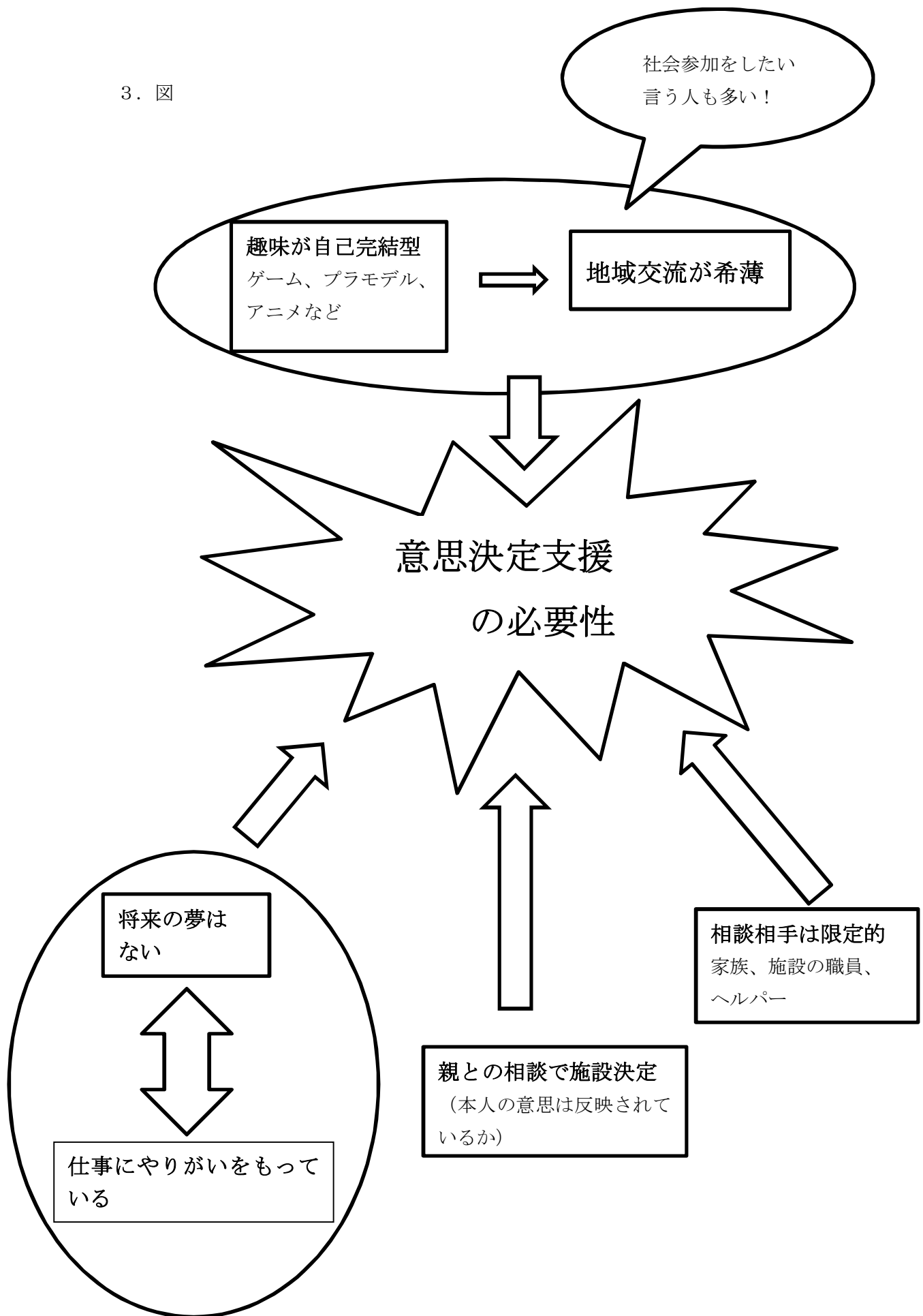
3. 考察

- 趣味は自己完結しているものが多く、交流に繋がるものが少なかった。
- 仕事にやりがいをもっている利用者は多いが、それが将来の夢に繋がらないという方が多かった。
- 相談相手は家族・施設の職員・ヘルパーであるため、家庭内や施設内で人間関係が完結してしまい、広がりづらいのではないかと考えられる。

4. まとめ

利用者の課題としては家族・施設関係者以外の交流の希薄さが挙げられる。家族や施設に頼るばかりではなく、利用者本人が物事を決定できるよう、意思決定支援が必要ではないかと考えられる。

3. 図



## グループ8. ドリームハウスⅢ・Ⅳ、・エルムンド小石川

### 1. インタビューの紹介

施設名/種別	ドリームハウス／知的障がい者グループホーム
日時	2016年10月28日 16:30～17:30
対象者	Aさん(30代・男性)、Bさん(60代・女性)、Cさん(40代・女性)、Dさん(30代・男性)、Eさん(40代・男性)、Fさん(40代・女性)
調査者	今野克紀、川畑勝敬、羽田野沙紀

### 2. インタビューの結果

#### ①相談相手

相談する相手が、職員の方や両親など身近な存在の人たちに相談していることがわかった。相談している内容として、1週間の中で起きた出来事などを話している。また、相談しやすい環境にあり、利用者の方と職員の方との関係は良好であると推測できる。

#### ②困っていること

困っていることとして、仕事の量が多い、コミュニケーションをとる事が難しい、この先どうすればいいのかわからない、同居人がうるさくて眠れない、体重が落ちないといった事が挙げられた。人それぞれ困っていることは多々あるが、仕事量が多い、この先が心配といった深刻な悩みもあり、利用者との相談の必要性があると感じた。逆に、困っていることはないといった意見もあり、普段の生活が充実していると言える。

#### ③仕事

ほとんどの人が作業所での仕事をしている。仕事内容は、箸詰め、チラシ折り、おでん製造などである。他には公園清掃や、障害者雇用のパン屋などで働いている人もいた。大変だという声もあったが、作業所で会長を務めてみんなをまとめている、パン屋の売り子でお客様と関わるのが楽しいという回答も得ることができた。責任感をもって仕事をしている、また将来仕事をもっと頑張っていきたい、長く続けていきたいという人も多く、仕事を楽しんでおり、生きがいにしている印象を受けた。

#### ④地域との交流

地域交流の程度は個々で差はあるが、地元のお祭りに参加している、行きつけの飲食店がある、スーパーやコンビニの店員と顔見知りである、近所の人とあいさつができるなどほとんどの人が地域と何かしらのつながりを持っているといえる。趣味を地域のイベントや大会で披露している利用者もおり、地域との交流を楽しんでいる一面も見られた。周りの方も障害を理解し、良い環境で生活できている現状があるといえる。



## ⑤将来の夢

将来の夢について聞いたところ、困ってしまい答えることが難しい様子の人が多くいた。一部では結婚をしたいという声も上がったが、ほとんどの人がわからない、とりあえず今の仕事を頑張っていきたい、健康で過ごせれば良いなど、将来については深く考えていない印象を受けた。

### 1. インタビューの紹介

施設名／種別	エルムンド小石川／知的障がい者グループホーム
日時	2016年11月3日 13:30～13:50・11月14日 19:00～20:00
対象者	Iさん(40代・女性)、Sさん(40代・男性)、Kさん(20代・女性)
調査者	寺田崇史、町野翠、石崎友梨

### 2. インタビューの結果

※この項目以降①～③は重複している意見が多く見られたが、あえて3つの項目に分けさせて頂いた。理由としてはこの3つの項目すべてに人が生きていく上で最も大切な事だと考えたからだ。また、これらの質問している最中の利用者の方々の生き生きとした顔が忘れられない。

#### ①好きな事(まだあるよ 人生楽しく なる好事)

この項目では、「テレビを観る」「お酒を呑む」「買い物に行く」「絵を描く」「お出かけをする」などすべての項目で一番多く意見が挙がった。好きな事を率先してできる環境だと感じる。さらに、「仕事」「グループホームでの生活」を挙げていた方もいらっしゃったので、楽しく仕事や日々の生活もされていることが伺えた。

だが一方で、口に出していないだけで好きな事が本当は実践できてない心配もある。

#### ②休日(休日は 外に出かけて ひと休み)

グループホームでは平日はそれぞれの作業所での仕事で忙しい分、休日は自分たちの時間を有意義に利用している印象を受けた。例えば、ボーリングやカラオケ、野球観戦など平日行けない場所に足を向ける人、実家に帰る人もいた。車いすの方が多かったため、移動支援を大変重宝しており「お出かけがしたい」という意思の強さを感じた。

休日活動の選択肢の一つに地域のイベントや交流が数えられるように、さらに地域での交流の場を広げてほしい。

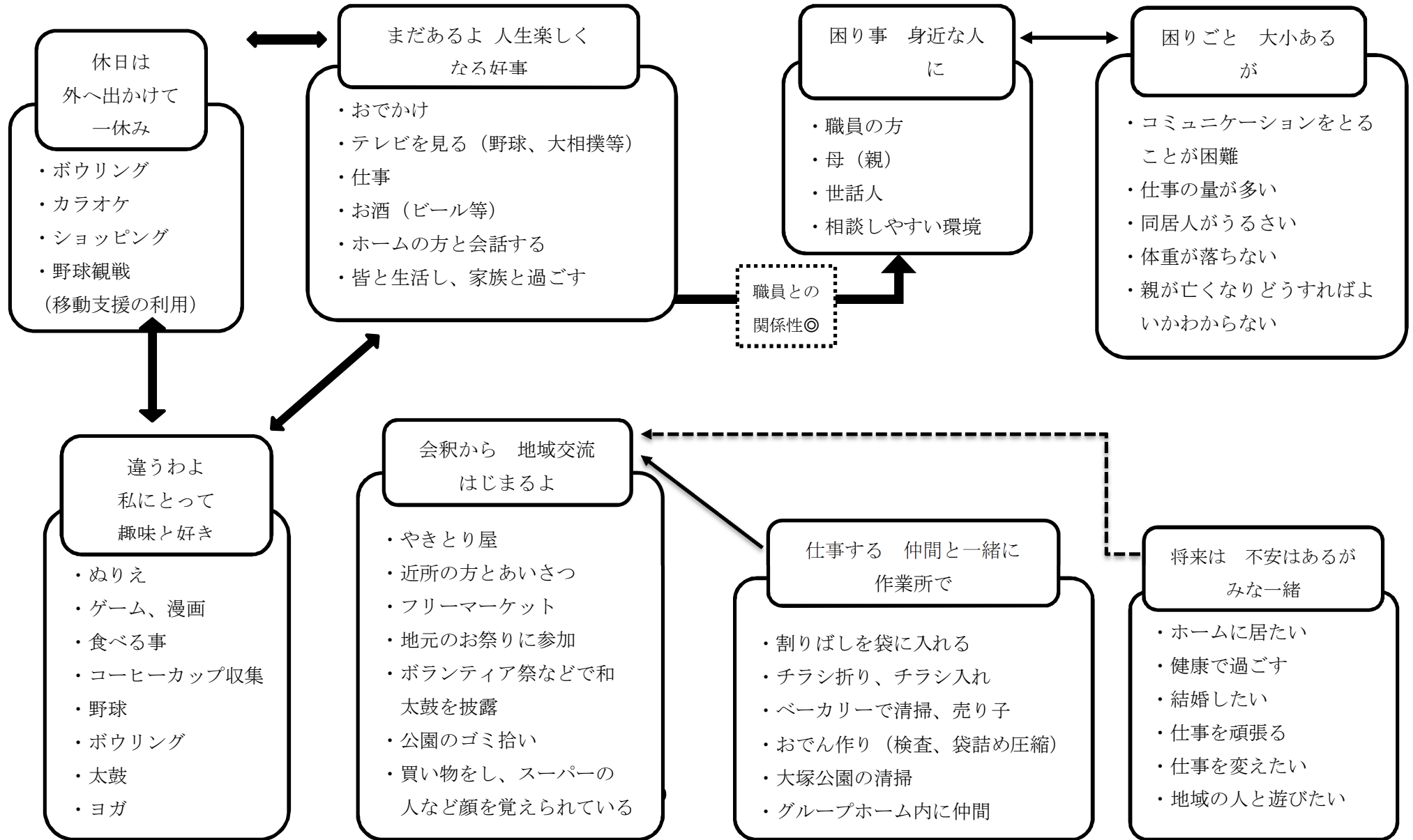
#### ③趣味(違うわよ 私にとって 趣味と好き)

ここでは『趣味は?』と意見を伺ったが、「ヨガ」「太鼓」「コーヒーカップ集め」「ゲーム・漫画」など項目①・②では挙がらなかったものが意見として出た。項目①・②とは別

に、さらに自分の中で強い意志を持ち取り組んでいるものが『趣味』というかたちで表れたのだろう。

このように、好きな事・休日・趣味をとっても、近いようでそれぞれに利用者の方の思いや考えの違いがあった。それをどこまで汲み取り、好きな事や興味のあることをそのままにするのではなく、趣味や休日の楽しみに変えていけるかが重要だろう。

3. 図



## 2. 調査者所感

### グループ1. 大塚福祉作業所

インタビュー調査をして、最初は少し戸惑いながらも、大塚福祉作業所の利用者の人たちが楽しそうにたくさん喋ってくれるので、こちらも徐々に落ち着いてインタビューすることができた。なるべく利用者が緊張しないように話しているつもりだったが、調査内容を見る限り利用者のあまり深い部分まで探れなかったようにも感じた。それでも、利用者の人たちが素直に語ってくれたので嬉しかった。

### グループ2. 小石川作業所

今回の調査を通して初めて知的障害者と時間を掛けて話す事が出来、彼らの意見を代弁する立場に人が立つ事の重要性和その難しさを考えさせられた。

調査が終わった後に1つの疑問を抱いた。それは帰結する先として『作業を細分化させる事』と『より地域と障害者が密に接することが出来る場所、機会の提供の推進』を報告書の中で挙げたが、その後者に関して、実は健常者が代弁する上での価値観の押し付け、ある種でエゴイスティックな提案だったのかもしれないと言う事だ。

我々は他者という社会資源と多く関わる事で切磋琢磨し、或いは癒しあい、自己を高めると思っているが本当に全ての人間がそうなのだろうか。

健常者の中にも他者との関わりを進んで拒む者も少なくない。そう言った人をこちらの決めつけで何かのコミュニティに属させる事は果たして正しいとは言い難いと思う。

自閉症を患っている方達に対して、その世界を広げる手伝いをする事は素晴らしい事だと思うが、軽率なアプローチは本当に本人達のためになるのか。マイノリティに立たされる方々への支援には一層慎重にならなければならないのではないかと考えさせられた。

### グループ3. 若駒の里・だんござかハウス

障害者の調査ではアンケートの対象が自分の要求を言葉にして伝えられないことが多い。そのため、調査において調査者の責任が健常者へのアンケートより大きいと感じた。対象者の意向をこちらで推察する必要があるからである。ゆえに調査を円滑に進めるには、調査者にコミュニケーションの技術を学んだ者が必要だと思われるし、対象者と慣れ親しんだ人間に仲介人になってもらうことも重要であると感じた。

### グループ4. 工房わかぎり

今回の調査で多くの知的障害者の方を対象に調査をさせて頂いたが、悩みや将来の展望に関する質問に対する回答がうまく引き出せず「特になし」と記入せざるを得ない場面に度々遭遇した。これは調査期間の短さから、対象者とのラポールの形成に十分な時間を要

せなかったことによるものだと考えられる。次回調査に臨む方々がもし時間の余裕を持って調査に臨めるのであれば、参与観察の時間を十分にかけて調査に臨んで頂きたい。

また今日、障害者運動が盛んになった時代にサービス利用を開始した知的障害者の高齢化が問題となりつつある。実際、調査の回答からも、親や家族に依存する知的障害者の方は少なくない印象を受けた。老老介護ならぬ老障介護の問題を解決し、安心して知的障害者が暮らせる社会を形成してゆくためにも、必要な施策について、行政担当の方々には考慮して取り組んで頂きたいと感じる。

#### グループ5. は〜と・ピア

自分の考えは持っていて相手にも上手に伝えられない利用者様も多く、少なからず私たちの推測が必要になってくるため難しさを感じた。しかし、普段聞けないことや、とても前向きな意見(は〜と・ピアにずっといたい)も出てきたので、良い意味での資料の参考になるのではないかと感じた。

#### グループ6. ワークショップやまどり

障害の程度が本当に人それぞれで、話せる人もいれば話せない人もいたが、同じ施設で同じように過ごすことができるのは、職員の方の努力があるが故であると感じた。

また、コミュニケーション能力が想像以上にあり、私たちの普段の暮らしと大きな差はないことが分かった。実際お会いして、利用者の方々の雰囲気明るく会話を楽しんでいると感じた。

#### グループ7. こぼん

2人組に分かれて施設利用者1人ずつインタビューを行なった。ほとんどの方は円滑に進んだが、利用者がこちらの言葉を繰り返すばかりだったり、こちらが利用者の言葉を理解できなかつたりして、なかなか進まないこともあった。調査実施期間がもっと長ければ、利用者信頼関係を形成でき、深い内容まで聞き取りできたかもしれないと感じた。

#### グループ8. ドリームハウス

外観は、普通の家と変わらない雰囲気で自分たちもリラックスすることができた。皆さんがとても明るく楽しい生活を感じた。インタビューは、全員がハキハキと答えてくれ、時折仕事や将来の事に関しての話では、真剣な眼差しで語っていたという印象がある。

#### 同グループ8. エルムンド

障がい者の方は、意思を伝えることが難しい。しかし、伝えたいことはたくさんある。本当に伝えたいことが伝わると表情がやわらぐと思った。グループホームの地域とのつながりは大きな可能性を持っていると感じた反面、現状はその具体策が見えてないように見

えた。

## おわりに

「知的障がい者の声なき声を聴く。」これがこの聴き取り調査の大きな目的であった。声なき声を聴くとは、障がい当事者とのラポールを形成し、当事者の発言に耳を傾け、文字通り、耳はもちろん、十分に目と心を使って、話を聴く態度を表明し、どのような小さなことでも拾い集める作業である。

そして時間と空間を共有した者だからこそできる解釈をし、当事者のメッセージを文字化することである。そのことが、次年度以降の行政の施策に反映されることを望みながら調査が実施された。この調査のために時間、エネルギーを費やした学生と、その学生の調査を可能にくださった文京区障害福祉課、区内施設の関係各位に感謝申し上げる次第である。